

和歌はたはしむる

~ 4
1606



利
1.606
卷

る及十二年七月成

わふ然

和歌とて此まを利序

守道乃秘事そのまひかたもや其書そのまひかた樟かた小この事こと行ゆく是こゝ秋

因よのこ儀ぎ撰せん成せい足あてて記き法ぽうのの人ひとののここ撰せん

ららふふももぬぬくく何なにぞぞ是こゝをを秘ひせんせんやや夏なつもも友とも人ひとのの小

卷まきをを社やしろのの事こと多おほししりりてて日ひ半かたのの事こと壯さうららりりよよ

つつかかるるががくくててままととううののここはは原もと地ぢのの乃なり

かかよよ河かののああららとと祿ろくううつつはは樟かた小このの事こと撰せん

らら人ひとのの室むろとと女むすめととかかららふふ是こゝをを撰せんららんんやや



是も黙して其初めに事公法^{そく}のやうに
もくもくはむと安易^{やすやす}うむ秘^ひ口^{くち}交^{まじ}等^ら
もよよけむ小厚^{こあつ}志^しある人乃よもよもよ
らんや諾^{だく}もるらんわ奇^きらんれまめりんと
して事^{こと}はむらんものありし

寶永五戊子家

洛下隱士

玉山堂席

孟春吉祥日

目録

才一 後普光園院撰政殿百首和奇

此何意運兼好点合し

才二 八雲神詠口交之事

日神の詠より三枝神詠し此事 大徳娘乃り

才三 和奇三神正傳口交之事

棟と日神りりり給ふ事

才四 和奇立句卅一字秘口交之事

此五三神の天交

才六 いづらに秘制なり

天盤戸乃事言天京の夏

才六 清くしこ乃秘制の事

八指文清奇なり

才七 海土の秘制なる夏

太神文記宣乃事

才八 土合に傳ふ事

素書鳴き此事

已上

和奇を記ししより才一

後普光園院極政殿百首和奇

此乃運兼好合点

一紙一葉ノ兼
判の別各紙乃事

春女首

いづらに日影を承し山をたれら乃ら尾の秘を志す

姿相克調り

いづらに海や海風を承し春をたれら乃ら尾の秘を志す

いづらに雲とてりて花を承し春をたれら乃ら尾の秘を志す

あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと

後京極殿
御一上六乃らるる月と花との心とそととらん

あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと

あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと

あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと

あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと
あふらぬや海の家はうらひもの心ばかりのうらみと

今更此日の長閑さなり松の枝の世もやわらわりの春
花の香のあふりよれをなふりてものうとあつる春は
又いんとてを別乃素なれといけら後とれれはけく

夏十首

ぬらうらうらな枝やふは乃と海とうたをふりてあつらん
ほろほろいじあもききとれとあつらはれとあつらん
世帯の明なれぬはれとあつらはれとあつらん
とくははは乃るもやう海を衣たよの海はあつらん

六月五日あつらんつとてあつらん
人なれぬあつらんあつらんあつらん
とくするあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらん

古きれあつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらんあつらん
あつらんあつらんあつらんあつらん

秋十首

花は葉のもともまてそふ社小やてあつた秋乃初風
くつろくともちかぢうゝ葉は葉乃末くはぬよのこつ白あ

世限優美妖艶

花のこたのこころのこぢうて松虫は鳴きあやうてお花よそり

とのこともなれに松虫乃色と云ふよお花

雪はらふよこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

露をねよ夜まのこつてわりのの秋の麻をけうあ

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

さう西れけくともはははははははは

涙あふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

花よふのこけうけはぬ露よう色れくともきふ出た色は

いづく勢とて里のむきぬきとるよ中川を月が影れ

まよの川をいふ影を今より中川と名

いひおれおきぬはしり中川と乃月いづらふはうせとて

九谷取寄れ神を神道御と

うそくうらんてたなき愛人乃神よ乃月此何中らん

罪よとららぬいと驚らん行方いと秋のよ月

秋よとて雲れ雨よおれおよたしとゆめ月をうらふ

三田川を流すよあのみまよとやうくもぬれをよふん

かきとやういふきんわねてりくく枯れそとら白鳥

冬十そ

あまは思ひ乃たのきをわくおその御手にあふまは

心法と落らよの葉を松風と月一はぬれきとては

経もたうとらうとをれ立別ふと乃山はま風をぬく

んかの川をかたれてぬきふりくくも衆う落らあま

文よまよしむきよとまよ乃月就お状てもゆるをの流あ

佐保川乃流の流のなまきるまうらんよよとてなぐらん

佐保川

飢水の氷をゆきて羊鴨乃上毛をくしとてまの川にまひり
 けしき多うり衣ぬきくもすそ舟へ書はるにゆし
 けふとゆ一日ぬきくもなきをよけとめ今日見書
 ぬれても匂りぬたきもよきふれとてまの川にまひり

急母草

けしき多うり衣ぬきくもすそ舟へ書はるにゆし
 けふとゆ一日ぬきくもなきをよけとめ今日見書
 ぬれても匂りぬたきもよきふれとてまの川にまひり

漢よいらしきりせりしもるしとてかゆり種もかひあがり
 けしき多うり衣ぬきくもすそ舟へ書はるにゆし
 けふとゆ一日ぬきくもなきをよけとめ今日見書
 ぬれても匂りぬたきもよきふれとてまの川にまひり

ふふせん人傳おゆこの業はれりよとられこのふかやん
 づきかこい人よまごう一物志いくたられうこそゆき
 又いふとまてとまごうお別したまかかふたふたのそ
 ねはゆかおまごうそのよれあるおれふまうしくはまごう
 今まれよお乃舞はまうふまうふおひひけす

おまごうとらとわおまごう

うま中れ枯ゆ尾花をばふたうれり社はるおとや
 信のほくことうりとるおめて後あふりいあめんは

はこのはめちらうととてんはうまうまうま
 今このははるぬ海りうはぬあおをうたはれはる

報せそ

ふふよとてうられとてんはれはをうきあめをぬ乃と
 かがうけは後うまらちやハ中くよあま人乃すまうばう
 くらくこさうらとてん中津浪ゆきも傍也よ松風を吹
 さままういおやハバドとてまめよとたの月よはち格う
 花をまういさもいさかてらうあハ旅ぬらふは様をのを

行末をかりひあらぬ長衣より目よりこそ社へぬを
約かゝるた、そなたん未済は後乃の未きころれぬ
年と治て世のうた事ぬまううふ考ハかくこそ公さ
今をふけうまらつうてやゆいそん未済乃世の
お返の冥かたさめ古はさうと〜のよも
人とさるおとねらうぬりたおと人との悪めさう

今かつのさうに

みくらぬ名のふれぬ依保川の事と

伝目けゝ夢の悪れ所さゆけむとく〜ゆめぬ
おれぬさるるはらむとれ白玉と世の〜事たわう
まらてのま乃世と依保川のすうらぬゆて
今を知ら人ととめとし恨〜家ぬさうらぬ
ゆ〜めとわ〜と世は居るふとの〜者た
おゆさんとさうら〜を中〜にん乃文をに〜ゆ
〜なう〜子世やすほしねる根〜あるら〜ぬ
か〜長は花〜〜は〜むらぬにわまる〜の悪

一を所を捉てさむく見まう世をいひくほとも子細
と入なきしんとせれも中く其系かろくよわく
ちうくくそくひの老の極れろく出よえと存て斗
舞ふとも信はやそけはきすことつまぬる也
燈入てい所奇と目とねとろく一貯は流しは程
よふぬんれうこくちひてうりぬていこく是地よまよ
てい後系極れは信奇ハ地奇くぬとろくて愛念れま
何乃人のしきろくまにはは信奇こそは信とまおは信と

せれろくまの信よろくろていはれとろくよやとけ
く縁いとあわそかまきとろていよくは信とろ事
ともおは信ろく入まの足まよ入き信かろく内ハ信ハやろ
てろくすそられくてもぬくかをれくま入しよ信
くろぬくまぬまろくくは信とろ

信上

信勝れ海乃海は信くてるぬれ

かの家をろりのあやなろく舞

親應三年八月廿八日

息

六十八首

松河

七十一首

慶運

四十二首

兼好

和弁をいはずまをり廿二

八雲神詠は乃事

古今集巻に、くみんやゆき神代中は弁れりどもさ
 さまんをれかすていものんをさぐらかりきしんれ
 よやがうてまこのをれみとよりぞみをとくあまらう
 くりはうくまのまこのをのみとはにほまをばあん神
 のこのうまがら女とすく給えんとせつがもれあはま
 ばくうくあふけみそのあはハのりれを乃らうとこ

てよもぬくちなり

八雲もつらもやうき流たこあふ

やうき流たこあふ

世傳奇世一それとドめ之故は極秘すまあり細川吉首

法印松水貞徳よ授子せし切代目日

八雲

八雲の雲のまの系電流虹文殿を遠り

祥電恒と掩ひ圍と先づる瑞福よの流祿なりん是

系蓋鳴きもみ人なりぬぬえ

い川と八雲恒 大蛇とうち流ひまはさちあふとたれし

娘とるんを好む天の思覚えさてあ冥乃中ふみとん

天よりぬきけぬし系電流虹現トてつらまても目

を夜まううせぬひ娘をとちがう流たんと祝し流

ぬと系なり 私日師傳孝人ののはりど流て一舟を登

恒とかかぬ八雲と云ふ八雲八雲八雲八雲八雲八雲八雲

てく恒の字ハ流へー

流とこあふ 祐田娘と後八雲恒れうちうすまうりて

とよんこ

八重垣流々 八重垣とて其類とぬれこめてと記
細いぬれを魔窟まきつ巖いわ魁くわい天怪化てんかい龍蛇虎狼野行等

た忽歎候ととらふひ入りてはかなし肉づきとの
んかろ 私日垣の字流てよむは傳と次の句此等の八重垣とてよ
とよとたにあらうとよまこ

其八重垣也 其と云字も其八重垣と八重垣
ものう破子つらんやまは神威の強剛と傳すまを
はなう此類乃字字眼と伝のてよと八は重前類

の字として此八重垣と何としてやうんやせきん

とよんこ 私日垣の字ハ馬へ上の垣と伝矢ふ
をくは垣と馬ハ地よまうゆへんは天地
法陽乃記やうに深秘ハ此やまの川とつしと伝との秘すこりやう
真の心則より入てさとしんし内と伝すの真秘河のやう此上而ん
や伝すををんてをさうるのまうれ十令莫傳唯被一人の秘の

去旨は神切紙よ日夫和奇ハ天神七代地神五代みんづ
まるえん混沌未分こん固常こ立たちたちたちたと大極の二元にはん一
元いちいちい五儀ごおおせせすす一陽いち五儀ご四象しとしのし四象し八卦はとはのの
八卦ハと六十四卦とせん天下八洲の凡支子兩儀ハ兩神

國披極者 豊封淳者 四象ハ太陽方陰方陽太陰之是

泥土者沙土者大土之通者大土之通者

八卦ハ八神ニ 面足者惶根者 存非語者 存非冊者

柞日ハ神ハ明鏡ニハ鏡ハ心ニ 愚按まろに神ハ魂魄

心流なる則ハ虚靈不昧ニハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

ハ心ノ理と備て萬事

申ふきのるを長岡めて鹿さるけり陽のこゝろ
書之月乃字れとき月ハ元是月例めて缺るこ
日れ柄るさごとくけりさると好るを以て月を
光と假て光とせり日れを陰のこゝろけりさると以
て十六夜より晦日ふて缺損を正月境の餅とい
ふ祝言とけり天照太神日輪の神體よかこり
万徳とけり千殃とけり此謂之天のうきこりれ
上より陽神陰神の奇ハや極とて此濫觴之古今席

ちとやゆり神代ハ奇れりこゝろさごとくべとまこれ
陽神陰神とのまきごひしぬふ所阿那宇礼志尔
陸屋宇摩志雄登古仁安君奴との奇又下照いぬ
乃わさるぬとやこゝろさごとくこゝろハ陰陽和合の元
たり右今席子男女の中をこゝろさごとく神代卷の白始
遺合為夫婦 易乾押天地と云毛詩爾雅文王后妃
夫婦の法を本朝の伴務物原氏狭衣大和後者亦乃
物原の男女婚姻の礼を是係天地交泰陰陽交合

ハ女之義

益

の如く神小陰陽會合の交々素蓋鳴る三怖の神也
外神乃此氣多一易所謂山澤通氣者良山東也
少男西南兌澤少女通氣而終娶交會而東也性
天一生水一陽來後生子東也喪朋安貞吉是陰
女必從陽男成化育之功而有安貞之吉云神書小始
適合為夫婦といふ是易小地天交泰乃此之神書小
吾見元處といふ是易小猶曰至哉坤元萬物資始
乃曰一神書小汝身之元處といふ八易小如日

坤元萬物資生と云是之柝倅特諾る倅并冊る大恰
て日神月神蛭兒素蓋鳴る此四神也生於日神也
乃曰八此葦原中津國乃とめて神書小天照太神
と素蓋鳴ると神中不和して天磐戸より神降る如く
葦原のさうらもかゝると八例乃中れ人民耕作乃業と
といふまに命の絶ん事となげとぬ神書小と云ま
な素蓋鳴ると出でとていひや神書小の神とてを火を
焼天香久山乃竹と切弓六張とあぐとと神書小と各付

加らかりし竹のきとさつとぬちをきかひつとさつとさつと
 きと吹なすし高林とひとてきとかごー糸かひてぬ
 ひとれを其付太神よふこひぬひく盤戸とほそめよわや
 ぬいもれぬ結糸乃西志らくくとるくもり 西のきま
 扱又素盞鳴尊出雲小橋川上酒をせぬふ其処ふ八岐 きうりやち
 大地とて あち 既八尾八さるる大地人と取服くさるるふ
 平奈植 ちか 是奈植とて二人乃因津神 いづつ ともさるが其娘よ
 稻田娘と云 い 其際乃娘とてさるその娘此大地よぶくせ

らうとさ胡むらぬまの父母此神かさかひせすう
 ぶうぶうみとらぬふるーめ あひま けけきさる八後女
 と吾よぬさせよ其大地と殺して ころ 殺とぬまのんとい
 父母よりとびてさもわをも命にささがるんといふさふおめ
 てみし と 謀とらぐりし娘とは浴せしめ あ 髪と八川のさけ
 とのきささせ八川のさつとぬち毒酒とさるく床とさるく
 かさて い 娘をさしめぬふ時むらぬま八ねらちさうさうふ
 との又娘らげけさるらぬとて八川の懸とむら毒酒

とていへこのことおひりぬとまゝにたはれとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ
たぬいぬはたぬいぬとてはれぬとてはれぬ

神祇のうへに取平奈慈足奈樞乃史婦聲^{しこいせ}出物と
して境と歎^んじきり此境は素盞鳴^{すさな}の得^とたひく
婦^め又太神^{かみのかみ}へまのせぬい^いか^か乃^の中^{ちゆう}和^わ睦^{ぼく}海^{かい}
しくま^まり^りま^ま境^境と今日^{けふ}信^{しん}と^とP^Pま^まは^は是^{こゝ}之^{こゝ}天^{あま}照^て
太神^{かみのかみ}乃^の玉^{たま}辨^わり^りは^はり^りま^まま^まに^に未^ま世^よ又^{また}玉^{たま}て^ては^は苗^な裔^{えい}
形^{かたち}見^みと^とて^て乃^の命^{いのち}と^と遺^い勅^{てつ}ま^まは^はた^たか^かて^て人^{ひと}
九代^{くわいだい}用^{もち}化^か天^{あま}皇^{みかど}よ^よ玉^{たま}ま^まて^て床^{とこ}と^と日^ひと^とま^まて^て乃^の身^み
ま^まる^るに^に世^よ既^{すで}ま^まる^るま^まる^るに^に御^み神^{かみ}威^いと^とお^おも^もれ^れま^まひ^ひく

別後小いしひなりし所もまは是と云境ありし
 又賢所今内侍ありて小用化天皇乃御宇は箱の中
 小虫乃とくはくそ働きのまよせそ御覽されら
 人乃形こいさうかどあしあ中しなひあせあ
 小箱よかりく人とかりうらうらと娘まことと
 倭姫ヤマト女とヤマトりなる天皇事れんは同娘の日吾
 ハ神小太社ニギハヤヒ人あめよ事さうりせで三種乃神器
 ぶつへも徳とあめ娘なりけも同文の中ハ神威

乃思をくそまはと衆んぐあめよ崇神天皇は御宇
 小倭娘の皇女是境宮御といてた奉て大内とわは
 とんとくひあめあめて積身は御居よとそ石凝イソノ姫命
あまのひらのみこと
 天目一箇命は御く御と境をいけ御居よとて地神乃
 そあへまし御し神聖と相共ふ大内よ留めを
 皇女神意とまらうらうらと奉てあこふまをよとあま
 しくしてあに天皇の御宇に終は御居宮へ入せ給ひ
 時兼回彦翁よ御達給ひていひくふくよまをよとあま

唯之入倭務の外更此御事ハ國常々之乃そ御ま
ス内之御鎮立乃取取百歳と御て雄畧天皇の御
宇亦倭姫皇女宜く吾ハ是天照太神の威命と御け
女女はヨリて志宣まう起起りて伊弉等共謹而明開明開
吾御祖母波乃與謝與謝の宮小内小内まは之天より起
うと一亦亦びびなまなまははううれれ加加御御と云
此由と養養ししままじじうういいそそたた勅勅をを下下大依大依の命命を
始とて彼より倭務と云はく倭務と云はくと云はく乃不之是

物言とてたまたもの事三

物言三神正傳乃事

倭倭神神言言乃乃知知るる乃乃始始ひひ一一終終とと云云ひひ始始ひひ
ららうう一一巨巨川川亦亦御御始始みみ其其由由ハハ自自此此始始りりももるる
にに一一とと云云ひひ乃乃終終つつ加加御御乃乃御御事事
と云と云まましし北北陽陽神神乃乃始始りり終終つつててゆゆもものの御御事事根根は
ほほととりりここ始始りりももてて火火出出せせししとと始始りり亦亦陰陰神神乃乃始始りり
うう亦亦ここままららぬぬららてていいふふ其其乃乃終終つつ一一也也也也

あけくつとせ給ひ吾前よまがうはしと給よけり

吾方れくつとせとせ給と給とて筑業乃目

向の橋檣系ふり給ふ其のほよ三川の源よ上此洲ハ

大真井中此洲ハ橋檣系下此洲ハ粟門速吸門とて此

上の洲ハ甚る中下此洲ハ甚あがとて中此洲よて

其とて給ふ是とみそとらひとい給て後の起原之

波のたつて其とぎ給ふ時わつとれ給ふ神と上尚男

命とて波よ入て其とて給ふ時わつとれ多と神と中

尚男命波り座よ入て其とて給ふ時わつとて給ふ神と

座尚男命とて此三神列位者大明神なりとて

西乃海河とてさうくつと給るなり

わつとれあしとて給ふ

とてよわり此三神化現して赤人人丸衣通姫とて

給ふ是と化現の三神とてよわ奇三神三所此大事是と

只あかき事之人丸赤人衣通姫奇道よ妙術なりとて

おんぬへこのことた今集れ座ふりて人よとわつとて

流らちよもなれ御時らうきまらまらにらる破れ
 けんよや新れらと志海しりしりしんらけけん時
 よかやさうらうらうおおさけりしの人九あんちん部
 己やうきうこれいをも部しむをとわくせもうとい
 ぬあうへしはれ夕(新田川よあうしお葉とみやれ
 おけんめお綿とんぬひまれわしき世ふら梯を人
 九うんよま雲うとのしけんれけしきう又ふのんれ赤
 人といふ人ふらうらにわ中くぬけうきう人

九ハ赤人がかよよぬんとかうく赤人ハ人九うきよ
 ぬん中かうくけんまきうといふ是等少てれぬぬ
 合とへさよ白人九赤人ハ父祖ぬしうらうは化現けれハ
 しぐえ衣通娘ハ元恭天皇乃后よそつてせぬひ葬しぬ
 ひて後天子乃身ふ海へけぬひく

まうらう又と此せうらぬぬれん

ちんをかましうきおあれ海時

此うと泳しさを新部しれお奇の海よお津時れ神君と

いづれは又和字は神乃地扱ひくものこましく
上筒男中筒男座筒乃と神別日神化規之と
くも日神乃忠徳とけさるゆへに故よ入日影と
いづこをま室と掩て居る之屋小棟とぬ川乃日神
めらる勢治ふ神と表せり日ハ子の刻より陽気初次
申よまゝのりくこの刻は陽気終之故よ己の字と
とつるとよあり午の刻より夜半にわたりて亥の刻
よかこゆるのりてくくハ棟の神と建く可思ふ

和字よりまゝとす

和字五句三十一字は秘爰乃事

和字乃三十一字五七五七七とよめり申秘爰又小日初
み文字ハ心の五行こま火土金水 中れ七文字ハ天神七代
下の五文字ハ地神五代下れ句乃七七七七雜即滅七福
即生と祝しめり又五句とまよ五行五常ハ配當
して秘事乃一の句と本と一五考ふに仁よ
高らにハ万物とくこら申ねまこれハ初句ハ一と考

棟梁とすらしお二の白と火と一五とよハ礼は高
ろ是ハ物ハ敬義之也二の白は河と取して二の白は
昔ん故にまやうよすし二の白ハ也二礼のと崇敬す
ろ是ハ礼の白とつり也二礼の白ハ令之是ハ義は高
貴爵正し一は非分ぬよ一也れよ義礼のつり也
曰の白ハ信は高ろ不動乃義之也ハ也二の白と以て礼
要とすらし曰の白こつて下れ白へらんかるとこし
とれと云へ土ハ五行の中れ王とかりて曰の白と信之

中五の白ハ水ハ五也ハ智ハ高ろ智ハ非善也ゆよ分
別せらばつり奇のておとわられん世のんはじ
くせられておと心一と奇と智れ白とつりもハ
とれもつりものとすし一は也方角よ志とつり也一
てよ一はもあられん也もろ白ハ一それれとつり也よ
究せらる一切乃生れよはるし一万物皆五行れ也よ
それよ一とつりつりもの皆ちとよむとつり也
右今集れ序ハ花よ鳴うつりすもははむかやん乃

いふはさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん
いふさげんいふさげんいふさげんいふさげん

さありよりし得るやとんは古はよきなりを先
をよぢういて泳をくし是定家これ終くこれハ一
そふ泳泳まれば神神と造り仏神と造り世界
と造り我身と造りふもつりてとく一それより
神神仏陀と感徳の道ハ一と徳周の奇にふれり
しはさげんいふさげんいふさげんいふさげん
義三神といふ事とは是又神乃おれ秘事く前よつふ
ふれれ配者よめをを合て授らば一世一人の信とて

いふさげん

五

奇道極秘薩頂とすくじく一人ははる多
二人よ及くす是は傳授する時ハ吉日候えりい後
吉玉律鳴乃由律加さるりしより伊前若令之教を
歎し枕明とて下ノ花とさるけ名香とさる
粒をうらふくして師中ともん所望とらりし
病文とてはさそり人ハ若令六中子らりし
所是と得く之をうらひ之若と悪といふ事と三悪と
ハ一ハ六つてうらむ人二ハ五若と人三ハ六不修乃

人世之悪乃人よ及くし千令はつひも扱す事なり
又三若といふハ一ハ六上篇二ハ六若若三ハ六位ん是之
出亦は不貞体老人よはさるれハ貞若といふ
之ん乃大事とさるるけハ修りハ律鳴乃
伊前とさるりしわひんといふ事なり
あやそく若ふ令うらひ五若といふハ和奇れ五句と過
席歌曲流といふ五字よわてく事と一人之若撰法
乃孤座ハ乃若うハ五若とよむ事なりハ若人

百人一を五方に秘す此は一とて是授らる事と懸
て是達乃奇と能く此を此の法五義を承て此
ほ乃くと邊 大なる此のひちて二の白うらうと
さざし海わうらう一もりこれの文字八人よそりて
取られハ此の思案して此事之取がわうと
大なる又ハ此のさざれうけわうと一とさざし
一とさうと一これの後成マ定案つ取てはとく
又字のわうと此のわうと一と後を羽院乃此の内裏

弁合小鴨長明奇を退せし後成マ奇ハいこと同じ
此ハハ文字のまうと此のまうと一余も此のまうと
後成マ文字とわうとつとさざれと一と此のわうと
若長乃分別と若乃の文字ちやうと此のわうと
白とすうとと女とハハわうと一とわうと乃と
わうとわうと一と此のわうと一と此のわうと
わうとわうと一と此のわうと一と此のわうと
わうとわうと一と此のわうと一と此のわうと

乃言てかきよるうはさうくめさすはちのこの二
乃句へのうけとよくは句よかき合はようとて一
邊乃字れんて

何くは御り序 かくくと何くとつとささる序
緒やうとれしと心とくられとてとまたさうけし
又トれめ文字入といつとらとなくとてやひの
ち河とていふやうすとんも志れ縁と二の句は
てわくは御といひちとてとさすはちのこの二

海乃以京といふはとてさすはちのこの二
朝野小 歌 此句も歌乃本と何わつた一字三
字三は字乃歌もて此の初めれ字と此句は
まへに此句の多う朝野小は彼海乃京字と
此の初とさすはちの初もかき

始これ行 曲 二の句はわくはさるのら
さるは曲とハ一それとさるはさるはさるは
さるは一曲はさるは魂がさるはさるはさるは

海乃以京

共

さういふことかぬぬははま(い)

船とそふ流共白と一それらなひあすれは
流とふうくくわけてはま(い)のふらぬ
進ハつたものも奇ハ(い)と家つのか
よ師近(い)ゆめ(い)とみ(い)解とす(い)の
ま(い)も(い)も(い)て(い)と(い)も(い)も(い)
初此(い)字(い)と(い)と(い)中(い)れ(い)右(い)
め(い)と(い)と(い)と(い)今(い)も(い)め(い)

このま(い)中(い)も(い)も(い)は(い)作(い)る(い)
と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)
め(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)
て(い)の(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)
か(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)
く(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)
て(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)
三(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)と(い)

三

三

古代是の基後より後成つは之の如し定家忠房より
より守りたる所定家祖師の家節にして此よりより
波戸人奇々異々〜調ゆる定家の子息高家より
之より高家又高家為相よりつは之よりより三
宗冷泉より高家よりつれて之よりより高家
つは守りたる所既よりより東下野守常孫此
家より代り傳へしとて高家宗祇は此よりより高家
道隆院よりつは之の波戸家より三代に續
道隆院 祿院
三光院

まゝ一箇して三光院の細川玄首は下は授子して此の玄
首の玄首に教へしは之よりより此の玄首は
は傳授を志す所〜上は下は道隆院より
授子して授へしより此の玄首は
てんより入る所より此の玄首は
此の玄首はとてわ〜此の玄首は
とてわ〜此の玄首は又初より此の玄首は
とてわ〜此の玄首は師傳たりしと

和奇もいれまゝなり

い川とらね秘訓の事

い川とらねの秘訓ははぶさよない川とらねなり
け字つとれとねみお通にちれ字中略して
そりといふ人乃無ん生すといふ字のなりす起之念
ものせれこけひやづらものこぼ李うそへ枯之枯は
系あそころも落人乃んよ枯さまれ故不待大座四時ん
かへんうそまふはみわきの
無窮中腸断是秋天と作り奇よ

い川とらねの秘訓

そのおもふものおきりなり

是皆秘れ秘傳とのくあり念に去中よまよく念を
しつ時念もあへんしそものせをこけひやがれあ
去りかさめみざうなれと念れ棄してそのとせこけ
是い川とらねい川とらね女腫よこりてい川とらね六脾之脾もが
みうられハれとせと鼻をい川とらねとせと鼻をい川とらね
病の長とつら鼻をい川とらねはせ身は害もてつと

い川とらね

二

今と小兒乃らさす事いふ事より又さす事いふ事
とあとのすけはく乃海にたひて万葉の奇

いとせう人ばさむらう事だよ

とあり乃らさす事いふ事

是史乃蔵立てせんとすと喜はる事いふ事
てよめり奇となん人はく事いふ事
も八倉の奈の志の悪事とさす事いふ事
かろくはく事いふ事

つしよんむらさくは素葺鳥さる令法乃神
たよと一わさ海くは如とさくはひ天思太神
てさぬい給天神是とさくませあひて天盤戸
ことろとせあふ是ま世乃いさくはくはくは神代卷
又曰次生素葺鳥さる神有房悍常以女忍且以哭泣
為行故令國內人民多以天抑使責山妻祐故其父
母二神勅素葺鳥尊汝甚無道不可以君臨宇宙
當遠適之於根岡矣遂適之文

又曰是儀素盞鳴尊之為行也甚無道一由此衆愆乃
 入于天石宮處^ニ而幽居^ニ之然後諸神^ト歸罪^ト過於素盞
 鳴尊而科^ニ之以千座置^ニ戶^ト遂促^ニ使^ニ板^ト髮^ト以贖^ニ其罪^ト
 亦曰板^ニ其手足^ト之凡贖^ニ之^ト而竟^ニ遂^ニ降^ニ聖^ト
 是等^レ又^レ意^レより^レ味^レふべ^ク之^レ何^レま^レれ^ル乎^トと^レ子^ト
 理^トを^レ以^テて^レ所^レに^レ胸^ト中^ト固^ク存^スる^レ義^トを^レく^レし^レ其^レ
 無念^ニせ^ニま^レる^レ前^ニに^レあ^レま^レれ^ル思^ハふ^レも^レて^レん^レ法^トの^レ月^ト月^ト
 光^トを^レむ^レへ^レし^レ是^トを^レ切^レる^レく^レし^レ心^ト身^ト清^ク淨^クせ^レて^レま^レす^レ

と^レ乃^レ念^ニを^レ息^ニよ^レなる^レ場^トに^レ天^ト京^トなる^レ也^トと^レ思^ハふ^レ神^ト
 ま^レり^レま^レり^レ肉^トす^レへ^レと^レも^レ也^ト此^ト或^レは^レ統^ト統^トと^レま^レり^レる^レ祭
 文^ト二^ト千^ト余^ト亦^トあ^レり^レ皆^ト祝^レれ^レ約^ト小^ト天^ト京^ト神^ト留^ト坐^ト須^ト
 と^レも^レ一^ト念^ト不^ト平^トれ^レ前^ニに^レあ^レま^レれ^ル思^ハふ^レも^レて^レん^レ法^トの^レ月^ト月^ト
 和^トと^レも^レ天^ト京^トと^レい^ハふ^レなる^レ人^トし^レと^レも^レと^レ云^ハふ^レ方^トを^レ乃
 ま^レ下^トと^レい^ハふ^レ約^ト中^トは^レあ^レら^レぬ^レ貴^ト乃^ト向^ト之^ト天^トは^レあ^レま^レす^レ
 乃^レ略^ト意^ト智^トを^レ別^トは^レせ^レあ^レま^レす^レれ^レん^レ京^トを^レ下^レむ^レの^レ下^ト
 略^ト万^ト物^トを^レむ^レん^レ手^ト生^トか^レり^レ天^ト上^トと^レい^ハふ^レ之^ト天^ト上^ト

うらむしむちがひめをす

ほしとび人乃ん根とすれと

とふれたを故とせしむ

此等秘奇を語りて故との事とよかりしりて
こしつらむにりてしりて多削道境といふもの女帝孝深
天皇は寵せしむるに依りて友位とのなり太政大臣す
原のかりきりかたありやきりんまれ若といひしる
報と答ふんといふもれども天位ハ帝れ御らるるまも

終るにハ八幡文へ勅聞なりとて和気清磨大納言正三位

と勅使してまのせ給ふ道慶清磨をよみて
りきりハ此夜乃勅使大平之御しりてらり
勅答ありてハ汝が身あり知んとといふ清磨ハり
ついにしりてきりいれむといふとせしむる
を勅報せられむいふまにむして守依りてし
前よりしりてのようしと養ひたるは
とられし御友らりし御け妙なる御色

八幡文

四

照正直之頭云 柞人ハ天地乃君之天地ハおさる起り人
の性ハ人ハ是にあらんや寛大なりと云ふまうむさ
時をせは是かありと云ふまうむさ
といふ事も彼合れしうてん性みざる陽とつる
毛と濡る人欲れ私とつる奴へし是天聖戸之神の
意と云ふといふまうむさ
て日神聖戸にこそりしはまうむさ
是いつれまうむさ
まうむさ

なうにこそりしはまうむさ
神是と云ふけとていふは
山の柞と云う上降はまうむさ
しと云ふはまうむさ
詞の意 宣はまうむさ
まうむさ
まうむさ
まうむさ
まうむさ

とてに八手力雄命ヤチカラヲウシノミコトかられお給ひて太神乃思是神オホカミノオモヒノミコトは
わきぬふ御子ミコは死して引出ヒキデしより思戸オモド取用トクヨウて入ま
らに是より人の心をけとむる事おまよりと云
とてあり

一書日天兒屋根命廣厚禰禰祈啓ヒトカミヒメノミコト矣ニ時日神ヒトカミノミコト用之ヨウシ
日頃者人雖多請ヒトノヒトニモシテ未有コトナク善其言之麗コトナク美者也コトナク乃細用盤コトナク
外而窺之ミタテ是時天手力雄命侍盤戸側ヒトカミノミコト引用之者日ヒトカミノミコト
神光滿於六合故諸神大喜ニヨロコブ

和奇とてたまはる利神ハ

土合れ傳の事

古はけしと合ハい川より之をうく合と志シひまづつ
しとわたり合はる祭マツルせずて思んせむと云うけて
合はるをれだいにうるとなる事細々と見合す
志と素直鳴る人思はかうして合はる神とせれまひ
て思ひとがうしていにうけるを思ふと云ふ太神オホカミより
こころれまうと云うておまおオホカミ一類の神ヒトカミはそと根の
おまおオホカミと云ふ

て後まろくひなり三と云
根六子之根か小方まを根 彼中より大蛇と追はれし梅田娘と
以て此の悪と改め吾孫とせしめしは小祇尊の御孫と云はれ
昔梅田川と云ふ河をたもとて是を念法乃孫の梅田川と
しめしは六令姓水とおせしめしは之を梅田娘八位
乃不現之故梅田娘乃父母とて祭是祭是祭といふは
此の事なりが是と云ふとの義之を信といひしは
づれ謂之を其に逢はれしは河のやうに八雲乃
孫縁より一歩もはなれずと云ふがことなり

京極道五條上町 奥林三郎右衛門開板

六十





Handwritten characters and a red seal at the top right of the right page.

Vertical handwritten characters on the left side of the right page.

Circular stamp or mark on the bottom right of the right page.

